

解説！作品に描かれた文化

美術館で展示されている作品をより深く楽しむために、背景にある文化をいくつかのぞいてみましょう。

・ 絵画と言葉（和歌、賛、狂歌、俳諧）

※「文学 × 絵画 —文学作品の絵画化と画譜・絵手本—」で詳しく紹介しています。

日本の絵画作品は書と密接なものが多くあります。例えば、江戸時代に描かれた『十二ヶ月花鳥図屏風』は、平安時代に藤原定家が月ごとの花鳥画について詠んだ和歌にちなんで生まれました。また『高士探梅図』には山水画や禅画などの余白に書き添えた詩や文章（「賛」と呼ばれます）が、『初鯉図』や『画本虫撰』には狂歌が添えられています。

・ 百物語

夜、人々が集まって順番に怪談を語り合う百物語の会は、一話ごとにあかりを一つ消してゆき、百話終わって真っ暗になったとき、妖怪が現れるとされていました。その百物語の会場には『幽魂の図』のような幽霊画が掛けられたのではないかと考えられています。また『新板浮絵 化物屋舗百物語の図』のように百物語が画題となっている作品もあります。

・ 江戸時代

幕府の支配のもと安定した江戸時代には、絵画や演劇などさまざまな文化の発展が見られ、庶民もその担い手となりました。

浮世絵には『江戸名所よし原仲の丁桜道中』や『花魁の図 姿野・すがゆふ』といった吉原や遊郭が画題となった作品や、『芝居の図』のように歌舞伎を画題とした作品があり、当時の江戸の文化を知る上での手がかりの一つと言えます。

また、「見立て」とはあるものをそれと似た別のもので示すことを指しますが、江戸時代の文化にはこの発想が随所に、とりわけ浮世絵に多くみられます。美術館の展示作品では、能の演目「高砂」を当世風俗の若い男女の姿で描いた『高砂図』が見立てて表現していると考えられています。



西川祐信 高砂図 江戸時代
奈良県立美術館蔵

(参考文献)

日本大百科全書（ニッポニカ）（ジャパナレッジ Lib）
デジタル大辞泉（ジャパナレッジ Lib）